

平成29年度第7回 医療法人社団主体会倫理委員会 会議記録の概要

開催日時	平成 30 年 1 月 15 日 16 時 ~ 16 時 30 分
開催場所	小山田記念温泉病院 第3会議室
出席委員	毛受、森、北村、原、山中、伊藤、浅野、清水、坂(敬略称、順不同)
新規研究計画の審議	
申請者	阪田 修平
研究名	透析中における睡眠呼吸障害(SDB)
研究内容 要旨	近年透析患者のSDBが注目されている。その割合は30~50%に及ぶとの報告があり、健常人に比べSDBの割合は10倍近いといわれている。生命予後の観点からSDBの早期発見に努める必要がある。 当院の透析患者に対して行った簡易睡眠検査の結果により判明したSDBの重症度と、血液データなどの評価項目からSDB患者における傾向を分析調査する。
審議結果	承認 2017-21
参考	「侵襲を伴わない研究であって介入を行わないもの」であり、「既存試料を用いて、集計・統計処理を行うもの」と考えられたので、書類審議を行い、その結果承認とした。
新規研究計画の審議	
申請者	内田 雅之
研究名	回復期リハビリテーション病棟入院患者において、リハビリテーションへの能動的参加を獲得した者の特徴
研究内容 要旨	当院回復期リハビリテーション病棟を退院した患者において、入院中にリハビリテーションへの能動的参加を獲得した者の特徴について、日常的に行っている評価結果や経過をもとに後方視的に調査する
審議結果	承認 2017-22
参考	「侵襲を伴わない研究であって介入を行わないもの」であり、「既存試料を用いて、集計・統計処理を行うもの」と考えられたので、書類審議を行い、その結果承認とした。
新規研究計画の審議	
申請者	野口 佑太
研究名	透析患者に対する興味関心チェックシートの有効性
研究内容 要旨	透析患者は週に3回、1回4時間の血液透析が必要であり、臥床時間が長くなることで、健常者と比較して Quality of Life が低いことが知られている。そのため、臥床場面において、対象者の興味や関心を聞きだすことができないことも多い。そこで、今回、厚生労働省が推奨している日本作業療法士協会の興味関心チェックシートを活用した結果を後方視的に分析する。
審議結果	承認 2017-23
参考	「侵襲を伴わない研究であって介入を行わないもの」であり、「既存試料を用いて、集計・統計処理を行うもの」と考えられたので、書類審議を行い、その結果承認とした。
新規研究計画の審議	
申請者	泉沢 祐樹
研究名	大腿骨骨折患者の歩行自立度における歩行中の患側下肢荷重量、荷重率変動について
研究内容 要旨	比較的簡便に測定可能な靴型荷重測定装置(バランスエイド®)を使用し、大腿骨骨折患者における歩行中の患側下肢荷重率と歩行自立度の関連を調査し、新たな歩行自立度や歩行速度の評価法を確立したい。
審議結果	承認 2017-24
意見	とくになし。

新規研究計画の審議	
申請者	鈴木 萌子
研究名	地域在住高齢者の生活範囲に与える因子の検討
研究内容 要旨	一次予防事業であるサロン事業に参加している地域在住高齢者を対象として、活動範囲状況と、心身機能・興味関心、社会的交流、主観的幸福度に関連性が存在するの かを明らかにすることを目的とした。活動範囲に影響を与えている要素を明らかにする ことで、地域活動における内容の充実化を図るための知見が得られることを目標とす る。
審議結果	条件付き承認 2017-25
意見	計画書、説明書の「超高齢化社会」を「超高齢社会」に改める。
新規研究計画の審議	
申請者	恒矢 保範
研究名	当院の癌リハビリ対象者の調査
研究内容 要旨	2010年よりがん患者リハビリテーション料が新設され、当院では2012年8月より入院中 のがん患者に対してリハビリテーションを実施し、がん患者リハビリテーション料を算定 している。がん患者へのリハビリにおいてはリハ前後における運動機能を比較検討した 発表があるが、運動機能とさまざまな心理面の変化を継時的に評価した発表は少な い。そこで、本研究では当院にてがん患者リハビリテーション料を算定している患者を 対象として、身体的・心理的な側面を定型的な評価指標を用いて分析し、その傾向を 把握することで今後のリハビリテーション介入に生かすべく取り組みたいと考えている。
審議結果	条件付き承認 2017-26
意見	対象者はすべて癌の告知を受けているとのことだが、受入れ方には個人差があると思 われるので、「(進行)がん患者の病気に対する効力感尺度」などの調査用紙を渡す場 合には、対象者の気持ちに十分に配慮する必要がある。
新規研究計画の審議	
申請者	野口 佑太
研究名	脳卒中後の麻痺側上肢に対する Virtual Reality の効果
研究内容 要旨	脳卒中後の麻痺側上肢に対して、ミラーセラピーや運動観察療法などの運動イメージ を用いた介入方法が報告されている。しかし、これらは自らの視線や頭部の変化に対 する映像の変化がみられない。そこで、近年、様々な分野で注目されている Virtual Reality (以下、VR) を用いることで視線に応じた映像の変化がみられ、没入感を得るこ とで効果的な介入方法となるのではないかと考えた。今回、脳卒中後の麻痺側上肢に たいするVRの効果について調査する。
審議結果	承認 2017-27
参考	本研究は大学病院医療情報ネットワーク研究センター臨床試験登録システム(UMIN- CTR)に登録予定である。